

M・K・ガンディーの「宗教政治」思想 —セクシュアリティ認識の変容とナショナリズム運動の展開—

間永次郎 (SD102004)

インド独立運動史の一大事件として知られる 1922 年のチャウリー・チャウラー暴動と第一次非協力運動の緊急停止、周囲の予想を裏切って世界中の耳目を一点に集めた 1930 年の「塩の行進」、1947 年のインド独立前後の時期から突如主張され始めた「世俗主義」の原則など、ガンディーの政治行動はしばしば本能的で合理性を欠いた「不可解」な性質のものと考えられてきた。これに対して、本稿では先行研究において十分に扱われることがなかった「ブラフマチャルヤ (*brahmacharya* ; 性欲統制、梵行)」の実験に窺われる彼のセクシュアリティ認識の変容過程を分析することで、これら一連の「不可解」とされていた政治行動の背後には、ある一貫した思考秩序の構造が見出されうることを論じた。

本稿では、ガンディーの政治生涯をサットィヤーグラハ闘争が開始された南アフリカ滞在期 (1893-1914) と、全インド的ナショナリズム運動が展開したインド帰国後の時期 (1915-1948) の二つに分け、それぞれに 3 章を割り当てて、ガンディーの思想形成に対する時系列な分析を加えた。これに序章と終章を加えた章立ては以下の通りである。

序章 「狂気」の背後にある合理的政治心理の構造

0. 序論：本研究の目的
1. 「ブラフマチャルヤ」はなぜ研究されなかったか？
2. いくつかの先行研究
3. 本研究の方法・史料・構成
 - 3-1. 方法
 - 3-2. 史料
 - 3-3. 構成

第1部 南アフリカ滞在期(1893-1914)

第1章 サッティヤーグラハ闘争の誕生/発生:^{ヴラット ヴィールヤ シャクティ}誓い・精液・霊力

0. 序論

1. サッティヤーグラハ闘争の「誕生」:^{ジャヌム} 宣誓の両義性
 - 1-1. 素朴な問い
 - 1-2. エンパイア劇場の演説(1906年9月11日)
 - 1-3. サッティヤーグラハの宣誓に至る心理的過程
2. サッティヤーグラハ闘争の「発生」:^{ウトパッティ ヴラット} 誓いの両義性
 - 2-1. AKとの比較:“Utpatti”概念に着目して
 - 2-2. 「認識」に先行する体験
 - 2-3. ブラフマチャルヤの誓いに至る心理的過程
3. 1913年の「秘密の章」:^{ヴィールヤ} 精液の両義性
 - 3-1. 精液結集と心身のシャクティ
 - 3-2. 精液結集と性欲
4. 結語

第2章 精液概念の形成:ラージチャンドラ、トルストイ、ヴィヴェークアナンダからの交錯する影響

0. 序論

1. シュリーマッド・ラージチャンドラからの影響
 - 1-1. シュリーマッド・ラージチャンドラとは?
 - 1-2. HSに与えた影響
 - 1-2-1. ^{ダヤー} 慈悲
 - 1-2-2. ^{アートマー} 魂
 - 1-2-3. ^{サッティヤ} 真理
 - 1-3. ラージチャンドラからの警告
2. レフ・トルストイからの影響
 - 2-1. 内的完全性と外的完全性
 - 2-2. HSに与えた影響
 - 2-3. トルストイからの称賛
3. スワミー・ヴィヴェークアナンダからの影響
 - 3-1. ヴィヴェークアナンダの『ラージャ・ヨーガ』(1896)

- 3-2. HS に与えた影響
- 3-3. トルストイとの交錯する影響
- 3-4. ラージチャンドラとの交錯する影響
- 4. 結語

第3章 乳汁と蛇:南アフリカにおけるブラフマチャルヤの実験

- 0. 序論
- 1. ヘルマン・カレンバッハとの実験 (1) : 乳汁放棄の誓い
 - 1-1. DASI の記述
 - 1-2. AK の記述
 - 1-3. カレンバッハとの同棲生活
 - 1-4. プーンカーの隠れた意味
- 2. ヘルマン・カレンバッハとの実験 (2) : 蛇の殺生^{ヒンサー}
 - 2-1. DASI の記述
 - 2-2. 蛇の両義性
 - 2-3. 乳汁放棄との関係
- 3. 結語

第2部 インド帰国から暗殺まで(1915-1948)

第4章 インド・ナショナリズム運動の展開:暴力と非暴力の間で^{ヒンサー アヒンサー}

- 0. 序論
- 1. 「ヒンサーの中のアヒンサー」と生殖器官の「禁圧」
 - 1-1. 用語の変換: 「慈悲」から「アヒンサー」へ
 - 1-2. マガンラール・ガンディー宛ての書簡 (1918 年)
- 2. 乳汁放棄の断念とローラット法の発布
 - 2-1. AK 第5部・第29章の構成
 - 2-2. 山羊の乳汁とローラット法
- 3. 非暴力の教義と外国製衣服焼却運動
 - 3-1. ナショナリズム運動の開始
 - 3-2. 「剣の教義」 (1920 年)
 - 3-3. 「歴史的集会」 (1921 年)
- 4. チャウリー・チャウラー事件と実験の「限界」
- 5. 結語

第5章 蛇の力:近代タントラ学からの影響

0. 序論
1. 刑務所出獄後（1924年以降）のブラフマチャルヤの実験
 - 1-1. アートマ・シャクティ
 - 1-2. 女性性
 - 1-3. ウールドヴァレーター
2. 近代タントラ学からの影響
 - 2-1. ジョン・ウッドロフ卿/アーサー・アヴァロン
 - 2-2. 『シャクティとシャークタ』（1918/1920年）
 - 2-3. 『蛇の力』（1919年）
3. 塩の行進とブラフマチャルヤの実験
4. 新たなジレンマ：供犠
 - 4-1. ウッドロフのジレンマ
 - 4-2. ガーンディーのジレンマ
4. 結語

第6章 ^{ヤグギヤ スワタントラー}供犠と独立：晩年のブラフマチャルヤの実験

0. 序論
1. 1933年の神秘体験
 - 1-1. 断食の目的
 - 1-2. 「声」
 - 1-3. ビハール大地震と「神の懲罰」
2. 政治的個人化の哲学的基礎
 - 2-1. スレンドラナート宛ての覚書
 - 2-2. ヲクティ概念とサーンキヤ哲学
3. 晩年のブラフマチャルヤの実験^{マハーヤグギヤ}（大供儀）
 - 3-1. 実験開始の政治的背景
 - 3-2. 二人の秘書の記録
 - 3-3. 大供儀の目的
4. 供犠と独立
 - 4-1. 実験の公表
 - 4-2. 独立インドに向けた新たな政治構想
5. 結語

終章 真理の両義性

以下では、序章を除く各章の要約を記す。

(第1章) ガーンディーのサッティヤーグラハ闘争は、1906年9月11日に、南アフリカ・ヨハネスブルグにあるエンパイア劇場で開催された「アジア人登録法」に反対する3000人の抗議集会をもって開始した。第1章では最初にこの集会で行われたガーンディーの演説をグジャラーティー語の原文から分析した。これによって、これまでしばしば考えられていたように、ガーンディーのサッティヤーグラハ闘争の開始を告げるものは、集会の中で決議された運動の平和的(≒非暴力的)抗議形態という「戦略」ではなく、その決議が行われる「過程」の中にあつたことを示した。ガーンディーは「神を証人として置いた宣誓 (*īśvarne sāksī rākhī kareḷī pratijñā*)」を立てる決意に至る過程で、激しい「混乱/驚き/動揺 (*gabhrāt*)」を体験した。そして、このような混乱状態にある中で自身の内側から突如「シャクティ (*śakti*)」が生じたことを後に回想している。この時に体験されたガーンディーの一連の心理的過程は、ガーンディーによって「全く新しい革新的なもの (*navīn*)」と呼ばれ、この体験をもって、ガーンディーは自身のサッティヤーグラハ闘争が誕生したと考えた。第1章の後半部では、南アフリカ滞在期のブラフマチャルヤの実験の中で最も重視されていた「精液結集 (*vīryasaṅgrah*)」(=*vīrya*を体内に蓄える実践。本稿では、*vīrya*を便宜的に「精液」と訳すが、この語が必ずしも物理的レベルの精液に還元できない「生命力」・「男らしさ」・「霊力」といった多義的意味を持つ概念であることを強調しておきたい)が、上記したサッティヤーグラハ闘争における「シャクティ」の発生といかなる関係にあつたのかを分析した。これによって、ガーンディーがサッティヤーグラハ闘争と精液結集の実践とが密接に関わることを直感的に感じていたと同時に、両者の間に十分に意識化されえない両義的理解を有していたことを示した。それは、ガーンディーの精液結集がサッティヤーグラハ闘争に必要な不可欠な「シャクティ」を生じさせる重要な身体実践と看做されていたと同時に、サッティヤーグラハの最も有害な妨害物とされる「性欲 (*viśaynī icchā, kām, vikār*)」を生じさせる危険な実践と看做されていたという両義的理解(=「ジレンマ (*dharmasaṅkaṭ*)」)であった。

(第2章) ガーンディーのサッティヤーグラハ闘争とブラフマチャルヤの実験(精液結集)との間に見出される「ジレンマ」は、シュリーマッド・ラージチャンドラ、レフ・トルストイ、スワミー・ヴィヴェーカーナンダという三人の人物からの交錯する思想的影響下で起こった。ガーンディーの『インドの自治 (*Hind Svarāj*)』(1909)に最も顕著に窺われるように、南アフリカ滞在期のガーンディーのブラフマチャルヤ思想は、

ヴィヴェーカーナンダの『ラージャ・ヨーガ』（1896）で説かれる「サイキック・プレーナ」の思想から強く影響を受けるものであった。それは性エネルギーの根元である *vīrya* を「霊力」へと変換する方法を教えるものであった。しかしながら、ガンディーが生涯を通して尊敬していたトルストイの文献の中で、ヴィヴェーカーナンダの思想が「古い宗教的迷信」として批判されていたことから、ガンディーはヴィヴェーカーナンダの思想を全面的に受容することがなかった。代わりに、ガンディーは自身のブラフマチャルヤ思想を極めて禁欲主義的なラージチャンドラのジャイナ教的ブラフマチャルヤ思想（=*vīrya* が性欲を必然的に生み出す誘因物と看做す因果論的理解；以下「精液＝性欲」と表記）によって意識的に基礎付けようとした。これによって、ガンディーの精液結集の思想には、心身のシャクティと性欲の発生をめぐるジレンマが生じるようになっていった。

（第3章）ガンディーの精液結集をめぐるジレンマは、南アフリカ滞在期にユダヤ系ドイツ人のヘルマン・カレンバッハという男性との間で行われたブラフマチャルヤの実験において最も顕著に見出されるものであった。ガンディーは自著の『南アフリカのサッティヤーグラハのイティハース (*Dakṣiṇ Āphrikānā Satyāgrahano Itihās*)』（1924）（以下、『サッティヤーグラハ』）の第2部・第11章の中で、カレンバッハとの「様々な実験」について詳しく書いている。そして、ガンディーは、それらの実験がサッティヤーグラハ闘争にとって必要不可欠なブラフマチャルヤの実験の一環であることを語っていた。しかしながら、この章に書かれてあるカレンバッハとの実験は、一見何らブラフマチャルヤの実験と関係がないもののように見える。具体的には、11章の中では、1912年にガンディーが「プーンカー (*phūṅkā, phūṅkvā*) 」と呼ばれる雌牛に対する強制的な搾乳の「残虐な」現実を知って、カレンバッハと乳汁を飲むことを断念したこと（「乳汁放棄 (*dūdhnā tyāg*) 」）が記されている。だが、この実験がなぜセクシュアリティの問題が関係するブラフマチャルヤの実験と看做されていたのか、ガンディーは何ら説明をしていない。本章では、この『サッティヤーグラハ』の第2部・第11章の内容を、南アフリカ滞在期にガンディーとカレンバッハとの間に交わされた一連の書簡を分析することで、乳汁放棄の実験がガンディーとカレンバッハとの間に芽生えていたホモエロティシズムの問題と密接に絡むものであったことを示した。ガンディーは乳汁放棄の誓いを交わす以前に、カレンバッハと二人で約2年間に亘る同居生活を行っていた。この時期に、ガンディーとカレンバッハは「カップル」を思わせる強い「感情 (*ras*) 」を抱くようになっていた。だが、この感情に「性的」な含意があると、時代的制約もあり二人はなかなか認めることができなかった。しかしながら、次のような経緯からガンディーはそのことに対して「驚異的/奇跡的 (*camatkāri*) 」自覚を抱くようになった。南アフリカ滞在期にガンディーは、（1）ラージチャンドラから乳汁が精

液を生み出し、精液が性欲を増加するという因果論的理解を学んでいた。さらに、ガンディーは、(2) ラージチャンドラとヴィヴェークアナンドの影響下で自己の性欲(=「自己浄化」の達成度)と外的な現実(=非暴力的現実の実現度)が対応関係にあるとする世界理解(本稿では、これを「主客一致のコスモロジー」と呼んだ)を抱くようになっていた。これによってガンディーは、1912年に知った「プーンカー」という雌牛に対する残虐な仕打ちが行われている暴力的現実が、まさに乳汁を飲むことによって高まったガンディー自身の性欲を反映するものであることを確信したのであった。この後、二人はすぐに乳汁放棄の誓いを交わした。

第4章からは第2部、すなわち、インド帰国後の時期の分析に進む。

(第4章) 1915年にインドに帰国して以降、ガンディーは死を予期させる大病を患った。そして、病気の回復のためにカレンバハと交わした誓いを断念して、乳汁を飲まなければならないとの医師の診断を受けた。ガンディーは死を選んで誓いを貫徹すべきか否か迷った挙句、最終的に医師の診断を条件付き(つまり、雌牛の代わりに山羊の乳汁を飲むことにした)で受け入れた。だがこれによって、ガンディーは精液=性欲が増加することを懸念するようになった。そして、病気が回復した直後に開始された全インド的ナショナリズム運動においては、精液結集の「禁圧(*rokvum*)」という抑圧的なブラフマチャリヤの方法が声高に唱えるようになった。この抑圧的方法においては、精液結集によって男性的シャクティ(闘争性、「男らしさ」、身体的強健性、クシャトリヤ性)を得ることの重要性が説かれながらも、性欲の増加の問題に向けた具体的な対応策が示されることはなかった。ガンディーは運動中に専ら性欲の「抑圧(*dāb*)」や「自己否定(*self-denial*)」の必要を主張し続けた。そして、ガンディーは次第にこのような抑圧的方法を主張する中で、自らの性欲が適切に制御されていない可能性を憂惧するようになっていったが、かえってこれに対して自己否認的な態度を取り、頑なに自らの抑圧的なブラフマチャリヤの方法の普及に努めた。この精液=性欲の発生に対する自己否認的で反動的な態度は、暴力が発生している現実を非暴力的であると主張する逆説的な非暴力ナショナリズム思想(「暴力の中の非暴力(*hiṃsāmāṃ ahimsā*)」)と連続的な関係にあった。有名な1920年の「剣の教義」や1921年の「歴史的集会」の演説は、このような逆説的非暴力思想を少なからず含蓄するものであった。ガンディーが指導するナショナリズム運動の「暴力性」(外国製衣服の一斉焼却など)がいよいよ過激さを増してきたところで、連合州ゴーラクプル県にあるチャウリー・チャウラーという町で、23人の警察官の殺害を伴う農民暴動事件(「チャウリー・チャウラー事件」)が発生した。ガンディーはこの事件をきっかけに、それまで自らが頑なに正当化しようとしていたブラフマチャリヤの実験が誤った方法に根差していたこと、そして、自らの精

液＝性欲が適切に制御されていなかったことをはっきりと自覚するに至った。ガンディーはこの後、すぐに全インド的ナショナリズム運動の緊急停止を命じた。

(第5章) 全インド的ナショナリズム運動の終了後、ガンディーはプネーのヤラワダー刑務所に投獄された。この2年の獄中期間において、ガンディーは運動中に限界を見出した自らのブラフマチャリヤの方法を見直すための新たな知見を模索した。ガンディーは獄中で131冊以上の文献を渉猟するが、その中でも「近代タントラ学の父」と呼ばれるジョン・ウッドロフ卿(＝アーサー・アヴァロン)のタントラ学の知見は、ガンディーのブラフマチャルヤ思想に「深く影響」を与えることとなった。そして、出獄後にガンディーは俄かに「ブラフマチャルヤの定義の範囲」を「拡大」していく必要性を語るようになっていった。具体的には、それまでのブラフマチャルヤ思想には見られない次の三つの概念が出獄後に主張されるようになった。(1) 心身二元論を超越するコスモロジカルな「アートマ・シャクティ (*ātmaśakti*)」概念、(2) 非暴力的でかつ能動的な「女性性 (*strītvā*)」や「陰萎性 (*napuṃśaktva*)」概念、(3) 精液を根絶するのでも抑圧するのではなく、頭上に上昇・結集することを可能ならしめる「ウールドヴァレーター (*ūrdhvaretā*)」概念である。これによって、ガンディーはそれまでの自身のブラフマチャルヤの方法に見出していた問題を解決するための知的・実践的手立てを得ていった。換言すれば、それまで禁圧＝抑圧＝回避しようとしていた精液＝性欲＝女性の「力・エネルギー」を否定するのではなく、かえって活用する視座を培っていった(＝「蛇の力」)。この新しいブラフマチャリヤ思想の理解のあり方は、1930年に行われた「塩の行進」においても窺われるものであった。一時的ではあったものの、塩の行進とその後展開した全インド的サットィヤーグラハ闘争は、後に「近代インド史の中で最もドラマティックな出来事の一つ」(D. ダルトン)と呼ばれるようになるほどに大きな成功を収めた。だが、1942年にガンディーが記したブラフマチャルヤに関する著述(『健康の鍵 (*Ārogyanī Cāvi*)』)の第1部・第10章「ブラフマチャルヤ

(*Brahmacarya*)」の内容に見られるように、ガンディーはこの時期のブラフマチャルヤ思想に対して新たな心理的葛藤を覚えるようになっていった。それはウッドロフのタントラ思想の「供犠 (*yajña*)」概念を特徴付ける「ヴァーマーチャーラ (*vāmācāra*)」に対するウッドロフ自身の「自己矛盾」と「両義的感情」を反映するものであった。

(第6章) 塩の行進後に、インドは二つのレベルで国家分裂の危機に瀕していった。第一がカースト・ヒンドゥーと不可触民との階級間対立であり、第二がヒンドゥー教徒とイスラーム教徒とのコミューナル対立である。ガンディーは前者の問題を解決するために1930年代前半に4度の断食実践を行った。この中でも1933年に行った断食に際しては、それまでガンディーが味わったことのない「特別な」神秘的体験が伴った。ガンディーは「完全に目覚めていた」状態で、まさに「人間が我々に何かを言っている」

ような「声」を聞いたと告白した。ガンディーはこれが「神の靈感 (*īśvarprerṇā*)」であると固く信じて疑わなかった。この体験を機に、ガンディーは断食を政治的大義からではなく、専ら「自己浄化」の問題との関係から主張するようになっていった。すなわち、ガンディーは外的政治状況を改善するための唯一の方法が、ガンディー自身の内面の霊的浄化にあると強調するようになり、それまでの大衆レベルのナショナリズム運動を個人的なもの (*vyaktigat*) にしていった。このような霊的浄化の試みにも拘わらず、国内の政治状況は一向に回復の兆しを見せず、1940年代に入ってから、むしろコミューナル対立がより一層激化していった。国内政治の悪化の責任が自身の性欲の未浄化にあると考えたガンディーは、1946年8月にベンガルで発生したコミューナル大暴動を機に、それまで実行に移すことを躊躇していた「完全な自己浄化」を企図した「激しい火の中を潜る試験」である「大供犠 (*mahāyajña*)」を開始することを決意した。この後、同年12月から翌年2月まで、暴動の中心地である東ベンガルのノーアーカーリーで、ガンディーは又姪（従姪孫）のマヌと裸で寝床を共にする実験を繰り返した。この実験が終わった後、自身のブラフマチャルヤの定義がいよいよ「達成 (*siddh*)」されようとしていると感じたガンディーは、インドが独立する直前の時期（1947年6月～7月）に、ブラフマチャルヤに関する最終見解を纏めた6本の記事を政治的出版物に連載した。同時にガンディーはこの時期から独立後のインドに向けた新たな政治構想（世俗主義原理）を提唱するようになり、そこでは大供犠で目指された「唯一無二の個人性 (*anokhuṃ vyaktitva*)」の実現（「脱性欲状態 (*nirvikār*)」を達成することによって、個人がコスモロジカルなアートマン＝シャクティと合一すること）を暗示する「宗教の個人化」の思想が説かれた。そして、ガンディーはコミューナル融和を求めた命がけの断食実践も行った。しかしながら、これらの試みによっても、国内の内乱は沈静化されず、より一層激しい形で暴動が拡大していった。その後、ガンディーはほとんど無秩序状態に陥った独立後のインドを目撃する中で、「どうしようもない無力さ」を告白し、「偏在する『力』の助けによって」、被造世界から自らを「連れ去っていただくように」と神に祈り求めた。この僅か3ヶ月後、すなわち、1948年1月30日、ガンディーはニューデリーで弾丸3発を受け78歳の生涯を閉じた。

（終章）終章では、本稿全体の議論を概観した後、ガンディーの宗教政治思想の中心にあった「精液 (*vīrya*)」概念について幾らかの哲学的考察を加えた。しばしば、ガンディーが生涯を通して信じていた精液の形而上学は、単なる「間違った迷信」（例えば、ビク・パーレーク）として蔑ろにされてきた。これに対して筆者は、この精液結集という主題は実証主義的論証の次元で捉えられるべき問題ではなく、認識論的両義性という哲学的観点から捉えられるべきことを論じた。つまり、精液は自己の身体と一体である限りで自己にとっての主体/主観を意味する。同時に、それは射精によって外部に

放出される。それが受精すれば「他者」が発生する。あるいはインド哲学的次元では、それは主客をめぐる段階的グラデーションを持つ両義的^{バリナーマ}転変を生じさせる誘因物でもある。また、精液は性欲という非物理的衝動を引き起こすと同時に、可視化され得る生物学的客体でもある。つまり、精液という問題は両義的存在のレイヤーが幾層にも重なり合う認識論的交雑の「場」に他ならないのである。このような認識論的両義性に着目した時、主体/主観とも客体/客観ともつかない精液を、ガンディーが主体/主観とも客体/客観ともつかない「存在 (*sat*)」概念を語源とする「真理 (*satya*)」の探求というサッティヤーグラハのプロジェクトの中心に据えたことが（そして、それを彼が「合理的」と感じていたことが）些少なりとも理解可能となる。換言すれば、この精液に関する「間違った迷信」を内在的に理解することなしには、宗教・文化・国境・ジェンダーの壁を越えて後世に多大な影響を及ぼすに至った、あらゆる二元論的認識の境界線（ヒンサーとアヒンサー、女性と男性、禁欲と活用、宗教と世俗等）を絶え間なく再構成しようとしたガンディーの「真理の実験 (*satyanā prayogo*)」の意味は決して見えてこないのである。